

21世紀COEプログラム 平成15年度採択拠点事業結果報告書

1. 機関の 代表者 (学長)	(大学名)	お茶の水女子大学	機関番号	12611
	(ふりがな<ローマ字> (氏名))	GO MITIKO 郷 通子		

2. 大学の将来構想

本プログラム開始時点における将来構想は、以下のとおりであった。

(1) 「共生のための知の再構築」と「女性の潜在能力の開発」

お茶の水女子大学は、大学のミッションとして、これらの使命と目的をかけた、グローバルな視点で、とくにアジア諸地域の女性との協働を重視している。本プログラムの実施は、そのための一里塚として位置づけられ、以下の点の実現をはかるものである。

先駆的な学際拠点としての大学院人間文化研究科の機能の深化

本研究科の発足当初からの学際的な教育研究組織の編成と諸分野の統合や協働による教育研究活動の実績の上にたって、学際研究の一層の深化と拡充を図る。

アジア女性研究者支援の拠点形成

わが国の女子教育の中心としての127年の伝統のなかで多くの留学生を受け入れてきた経験と実績を活かし、現代のジェンダー問題の解決を志向する課題設定型の本プログラムの性格に即して、アジア女性研究者支援の拠点形成を図っていく。

知的・教育的実績と本プログラムの関係

本学のジェンダー研究センターは、国際的知名度も高く、日本・アジア地域を代表する研究拠点として実績を挙げてきた。創設当初から女子高等教育機関として男女間の不均衡に挑戦しつつ先駆的な女性研究者を輩出してきた本学の歴史そのものが、本拠点の基盤的実績である。それら豊富な伝統と蓄積を再構築しつつ、研究水準の向上により、より強固な理論構築をめざす。

(2) 個性化と高度化のための本学の戦略

これまでの学際研究の成果をふまえ、統合・融合的なプログラムを形成して、とくに以下の特色を鮮明化することに意欲的である。

統合・融合的研究における個別学の位置づけ

統合・融合的な学際研究活性化のための留意点の一つは、その基礎をなす個別学の十分な研究実績をもつ研究者集団を組織することであり、本プログラムでは、そのことが実現している。さらに後継者養成のための教育にあたって、統合・融合的研究を志向しつつ、基礎個別学の強化を怠らないことにも留意している。

統合・融合的理論・方法の導入とジェンダー概念の導入

本学における統合・融合的学際研究は、統合に関わる理論と方法を追求する段階に入っているが、そのさいに本学では、ジェンダー研究視点の導入を積極的に進めてきた。今後はジェンダー研究の領域における統合・融合的な研究・教育の深化を図りながら、ジェンダー概念を核とする学際的な教育・研究の実施体制を確立するよう組織改編を検討する。

社会との関係の問い直しと倫理的配慮

統合・融合的学際研究への要請は、学問と社会の関係の問い直しに基づくものであり、研究対象者や、その成果の享受者への倫理的配慮は不可欠である。研究成果は、男女共同参画社会の形成と、現代世界のジェンダー問題の解決のために、広く発信し活用する。

第三世界を含めた海外研究教育者集団との協働

本プログラムを通して、国際会議への参加、海外でのフィールドワークの実施等の機会を拡大し、研究・教育の国際交流の機会を拡大する。そのさいには欧米に偏重することなく、アジアを中心とした第三世界を含み、多文化共生に配慮して、研究教育者集団との協働を進める。

(3) 学長を中心としたマネジメント体制

以上の特色をもつ拠点形成の実現を図るため、学長を中心とするマネジメント体制を確立する。

予算措置 COEプログラム支援のための研究費の傾斜配分に加え、若手研究者・研究支援者への研究費支援、国際シンポジウム等の開催への支援を、学長裁量経費等により実施する。

教育研究組織の改編 本プログラムの実施に必要な教育研究組織はすでに確立しているが、さらにプログラムの進行に伴って必要となれば、新たな組織改編も検討する。

施設・スペースの整備 人間文化研究棟内に新設されるプロジェクト・ラボなど、本プログラムの活動スペースを確保する。

研究者・研究支援者の支援 退職者のポストを「学長手持ち」として一括し、本プログラム等の重点領域の研究者の補充にあてる。

学長中心のマネジメント体制の強化と充実 学長

の指導力強化のための体制をすでに確立しているが、今後、全学的見地からのカリキュラムの検討、スペースの確保等についてもその機能を発揮させていく。

### 3. 達成状況及び今後の展望

#### [取り組み状況および成果]

2で述べた将来構想および拠点形成の支援策についての取り組み状況および成果は以下のとおりである。

**研究者配置の措置と事務組織による支援体制の強化**  
本プログラムの支援のために専従の若手研究者として専任講師1名を措置するとともに、本プログラムの中心的役割を担う「ジェンダー研究センター」の強化のため、准教授1名の補充等の支援策を実施した。事務組織についても、平成16年度からの「学術・国際課」の新設等の組織改変により、内外の研究機関との研究協力の強化のための措置を実施した。

#### 研究スペースの提供

本プログラムの事務局用スペースとして1室、若手研究者用スペースとして1室（約60㎡）を提供した。

#### アジア地域への教育支援事業の推進

アジアから発信するジェンダー研究教育推進のために、平成17年度には、アジア工科大学院大学（タイ）と「ジェンダーと開発」分野における大学間交流協定を締結した。またアフガニスタン女子教育支援事業、アジア女性研究者支援事業などをおこなってきた。

#### ジェンダー学際研究専攻の拠点性を強化する研究・教育プロジェクトの推進

本プログラムによる研究の成果と、ジェンダー学際研究専攻および関連分野の教員の共同による研究・教育活動の積み重ねに基づいて、魅力ある大学院教育イニシアティブ「＜対話と深化＞の次世代女性リーダーの育成」に協力し、ジェンダー学際研究専攻は「男女共同参画リソース副専攻」を担当した。

#### ジェンダー学際研究専攻を中核とする人間文化研究科の機能強化および大学院改組の実施

本プログラムと21世紀COE「人間発達科学」および上記の諸プロジェクトの活動の成果をふまえ、大学院人間文化研究科の機能強化を図るために、人間発達科学専攻等の組織再編により、平成17年度には「ジェンダー学際研究専攻」（博士後期課程）、平成18年度には「ジェンダー社会科学専攻」（博士前期課程）を新設した。以上の成果に基づいて平成19年度からは教員を原則、大学院に所属させる「大学院改組・重点化」により、大学院人間文化創成科学研究科を創設した。

学部教育においては、平成17年度にジェンダー・開

発教育を包含する「グローバル文化学環」コースを新設し、大学院教育への導入教育プログラムを設けた。

#### 女性研究者育成体制の抜本的強化

本プログラムでの若手研究者支援の成果をふまえ、平成17年度以降、ポスドク等若手女性研究者の採用拡大、大学院イニシアティブ3プログラムの実施、「女性研究者に適合した雇用環境モデルの構築」「女性リーダー育成プログラム」等の全学的な取り組みをおこなった。

#### 倫理的配慮を重視する研究体制の構築

本プログラムでは研究倫理綱領を策定し、人文社会・自然系の多くの分野に先駆けて、調査の倫理審査を義務づける仕組みを整備したが、その成果をふまえ、本学全体で平成18年度に「研究者行動規範」の制定、研究倫理委員会の設置等の研究倫理を確保するための基盤整備をおこなった。

#### [補助事業終了後の展望と支援方策]

本プログラムの成果を進展させ、世界的な教育研究の拠点を構築することは、「研究レベルの高度化をはたし、COE研究拠点を構築するとともに、その研究を踏まえた専門教育を充実させる」とする本学の中期目標の達成と、ミッションの実現のために不可欠である。このことをふまえ、補助事業終了後も、以下の支援方策を実施することを「年度計画」等において明確化し、その財源を確保することとした。

#### ジェンダー研究センターの強化

本プログラムの成果を継承し、さらに飛躍的に進展させ、世界的な研究教育拠点の中核となる組織としてジェンダー研究センターの強化を図る。大学は引き続き、ジェンダー研究センターでの研究教育の推進のために研究スペースの提供、研究者の配置等必要な支援をおこなう。

#### 女性研究者育成体制の更なる強化

大学は本学独自の予算措置に加え、競争的資金・外部資金を活用し、ジェンダー研究の拠点性を強化するための教育・研究プロジェクトを引き続き実施し、さらにその充実強化を図る。

#### 事務組織による支援体制の抜本的強化

大学はチーム制の導入を核とする事務組織の抜本的改革に取り組み、教育支援チーム・研究協力チーム等を核として、事務組織・教員組織の協働による柔軟かつ効率的な教育研究の推進・支援体制を構築する。

21世紀COEプログラム 平成15年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	お茶の水女子大学		学長名	郷 通子	拠点番号	J07
1. 申請分野	F<医学系> G<数 学、物 理、地 球 学> H<機 械、材 料、其 他 工 学> I<社会科学> O<農、林、漁 業>					
2. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	ジェンダー研究のフロンティア ―<女><家族><地域><国家>のグローバルな再構築― Frontiers of Gender Studies: Global Reconfigurations of 'Woman', 'Family', 'Community' and 'the State'					
研究分野キーワード	<研究分野: ジェンダー>(人間開発)(法・政策)(経済・労働)(医療・身体)(思想・表象)					
3. 専攻等名	ジェンダー研究センター、ジェンダー学際研究専攻(旧:人間発達科学専攻から独立:H17.4.1)、比較社会文化学専攻、(国際日本学専攻は、比較社会文化学専攻と併合:H19.4.1)					
4. 事業推進担当者	計 18 名					
ふりがな(ローマ字) 氏 名	所属部局(専攻等)・職名		現在の専門 学 位		役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)	
(拠点リーダー) kainou Tamie 戒能 民江	人間文化創成科学研究科 (ジェンダー学際研究専攻)・教授		法女性学 法学修士		研究統括、プロジェクトA・リーダー	
Ito Ruri 伊藤 るり	ジェンダー研究センター・客員教授、 一橋大学大学院・教授		国際社会学 博士(社会学)		プロジェクトA・サブリーダー	
Kunagai Keichi 熊谷 圭知	人間文化創成科学研究科 (ジェンダー学際研究専攻)・教授		オセアニア地域研究 社会学修士		プロジェクトA担当	
Adachi Mariko 足立 真理子	ジェンダー研究センター長、人間文化創成科学 研究科(ジェンダー学際研究専攻)・准教授		フェミニスト政治経済学 経済学修士		プロジェクトA担当	
Sinotuka Eiko 篠塚 英子	人間文化創成科学研究科 (ジェンダー学際研究専攻)・教授		フェミニスト経済学 博士(商学)		プロジェクトB・リーダー	
Nagase Nofuko 永瀬 伸子	人間文化創成科学研究科 (ジェンダー学際研究専攻)・教授		労働経済学 博士(経済学)		プロジェクトB・サブリーダー	
Mifune Michiko 御船 美智子	人間文化創成科学研究科 (ジェンダー学際研究専攻)・教授		生活経済学 家政学修士		プロジェクトB担当	
Mizuno Isao 水野 勲	人間文化創成科学研究科 (ジェンダー学際研究専攻)・准教授		経済地理学 博士(理学)		プロジェクトB担当	
Tachi Kaoru 館 かおる (59)	ジェンダー研究センター・教授、人間文化創成科学 研究科(ジェンダー学際研究専攻)・教授		女性学・ジェンダー研究 文学修士		プロジェクトC・リーダー	
Ogawa Mariko 小川 真里子	ジェンダー研究センター・客員教授、 三重大学人文学部・教授		生物学史・科学とジェンダー 理学博士		プロジェクトC担当	
Hara Hiroko 原 ひろ子	ジェンダー研究センター・非常勤講師、 城西国際大学大学院・客員教授		文化人類学 Ph.D		プロジェクトC担当	
Namihira Emiko 波平 恵美子	人間文化創成科学研究科 (比較社会文化学専攻)・教授		医療人類学 Ph.D		プロジェクトC担当 (平成17年3月31日辞退)	
Tuge Azumi 榎 あづみ	ジェンダー研究センター・客員教授、 明治学院大学社会学部・教授		医療社会学 博士(学術)		プロジェクトC・サブリーダー (平成15・17~19年度)	
Mutou Kaori 武藤 香織	ジェンダー研究センター・非常勤講師、 信州大学医学部・専任講師		医療社会学 博士(学術)		プロジェクトC担当 (平成16年4月1日追加、平成17年3月31日辞退)	
Takenura Kazuko 竹村 和子	人間文化創成科学研究科 (比較社会文化学専攻)・教授		批評理論・英語圏文学 博士(人文科学)		プロジェクトD・リーダー	
Amano Chika 天野 知香	人間文化創成科学研究科 (比較社会文化学専攻)・准教授		西洋美術史 博士(文学)		プロジェクトD・サブリーダー	
Ishizuka Michiko 石塚 道子	人間文化創成科学研究科 (ジェンダー学際研究専攻)・教授		カリブ地域研究 博士(地理学)		プロジェクトD担当	
Kan Satoko 菅 聡子	人間文化創成科学研究科 (比較社会文化学専攻)・教授		近代日本文学 博士(人文科学)		プロジェクトD担当	
5. 交付経費(単位:千円) 千円未満は切り捨てる ( ) : 間接経費						
年 度(職)	1 5	1 6	1 7	1 8	1 9	合 計
交付金額(千円)	111,000	118,800	119,400	111,990 ( 11,199 )	109,000 ( 10,900 )	592,289

## 6. 拠点形成の目的

少子・高齢社会の到来、性に関わる人権侵害、科学・医療技術の急速な展開と法的・社会的対応の遅れや世界的な経済格差の拡大、紛争下での暴力、女性労働力の国際移動など、日本社会や国際社会が抱えるさまざまな課題に対するジェンダー視点からの解明をおこない、日本における男女共同参画社会の形成のみならず、アジアから発信する「ジェンダー研究のフロンティア」形成を目的とする。

本拠点は、グローバル化が進行する現代世界における新たなジェンダー課題群を間アジア的な文脈から学際的に検討してジェンダー研究の新領域を開拓し、〈女〉〈家族〉〈地域〉〈国家〉のグローバルな再構築をめざしており、以下の4点を目的に掲げた。

- (1) グローバル化が進行する現代世界の多様な課題と要請に応えるジェンダー研究の新領域を開拓して、アジアにおけるジェンダー研究教育拠点を形成すること。
- (2) アジアの歴史的体験や思想体系を参照し、間アジア的対話を通じたグローバルなジェンダー研究を、アジアから発信すること。
- (3) 院生や若手研究者の主体的な参画を推進するとともに、研究支援プログラムを実施して、次世代ジェンダー研究者の育成をおこなうこと。
- (4) 国内外の研究機関や研究者との緊密な学術交流を通じて、国内およびアジアにおけるジェンダー学術ネットワークを構築すること。

### 【拠点の特色】

国立大学唯一のジェンダー研究センターを中心に、幅広いジェンダー研究の学際的な推進と、大学院における学際的ジェンダー教育が高く評価されてきた。ジェンダー研究センターと大学院関連専攻が有機的に連携し、多角的かつ体系的なジェンダー研究教育を推進して相乗効果を発揮できる。

- (1) **明確な目的** ジェンダー研究・女性学を基盤として、社会科学・人文科学・科学技術論などの学問分野を領域横断的に追及して、ジェンダー研究を学際的に推進するという明確な目的を有する。
- (2) **アジアにおけるジェンダー研究の拠点形成** 世界水準の大学・研究機関・研究者との共同研究・交流の実績を活かして、アジアにおける学術ネットワークを形成することができる。
- (3) **問題解決志向の研究教育の展開** 日本における男女共同参画社会の実現に向けて、問題解決志向型の

研究教育を展開する。事業推進担当者は、国・地方自治体や国際機関の政策形成・展開に寄与しており、学問知と実践知の融合による社会的貢献をさらに推進する基盤を有する。

### 【国内外の現状と本拠点のユニークさ】

近年、ジェンダー研究は重要かつ独立した領域として学問的認知がなされるようになった。科学研究費補助金では、2002年度より複合新領域の分科・細目として「ジェンダー」が設置された。だが学術全体としては必ずしも重要性が十分に認識されず、また特定の学問領域やテーマに偏りがちである。他方、変容する社会状況の下で、ジェンダー研究の必要性和有用性はいよいよ増している。1995年北京世界女性会議以後、ジェンダーの主流化をめざして、アジアにおけるジェンダー研究教育は飛躍的に発展しつつある。本拠点は、歴史、実績、研究教育領域の広さで国内で抜きん出た条件を具備する。東アジアにおいて、梨花女子大学（韓国）や北京大学婦女研究中心（中国）など、ジェンダー研究の拠点となる大学機関があるが、本拠点は、外国人客員教授招聘制度を整え、国際的なジェンダー学術ネットワークを恒常的に構築しうる点でユニークさを有する。また英語圏ジェンダー研究に収斂しがちな北米・西欧諸国のジェンダー研究と比して、アジアにおける経験を活かして多文化的視点をもった先取的ジェンダー研究教育拠点となりうる。

### 【期待される研究教育成果】

- (1) 男女共同参画関連政策の実施に必要な政策提言能力や問題解決に必要な知見を備えた人材の育成。
- (2) 地域社会と連携して、新しい公共性を構築するための場を提供し、NPO/NGOなどの支援をなしえる。
- (3) 社会の諸問題に対して、調査結果の分析に基づいた具体的提言をおこなうとともに、その基盤となる新しいジェンダー概念と理論を獲得する。
- (4) あらゆる学問領域にジェンダー視点を導入し、新たな知の創出をおこないえる。その制度的表現として、大学院博士後期課程にジェンダー研究専攻を設置する。
- (5) アジアから発信するジェンダー研究教育拠点として、世界最高水準の知の共有と交流をなしえる体制整備が期待できること。

## 7. 研究実施計画

本研究拠点形成の目的は、男女共同参画社会形成に向けて、ジェンダーを触媒として、より高次の「人間開発」をめざし、「法・政策・開発」「経済・労働」「医療・科学技術」「理論・表象」の各パースペクティブを連動させて追究することにより、〈女〉〈家族〉〈地域〉〈国家〉のグローバルな再構築をめざすことにある。そのため、次世代のジェンダー研究を担う人材の教育態勢を整備するとともに、以下の研究プロジェクトを遂行すると同時に、中間評価結果のコメントに対応して、プロジェクト横断的な研究統合体制を整備する。

### (1) 各プロジェクト別研究の推進

【プロジェクトA】の目的は、「ジェンダー公正と多民族・多文化共生に基づく公共政策と男女共同参画社会形成の諸条件の解明」である。東アジアにおけるDV政策調査および比較研究、アジアにおける再生産領域におけるグローバル化とジェンダー配置に関する調査および比較研究、「ジェンダー・センシティブな開発」政策調査研究など。

【プロジェクトB】の目的は、「少子化とエコノミーの相互関係の解明と政策作用についての研究」である。中国および韓国における大規模パネル調査による就業、家庭内の資源配分、ライフサイクル上の対応に関する東アジアの比較をおこなう。

【プロジェクトC】の目的は、「医療・身体・科学技術の進展に伴う現状把握とそれに対応する政策的提言とカリキュラム開発」である。アジアにおける「ジェンダーと科学・技術」研究、人体資源の流通や医療機器に関する各方面での従事者への聞き取り調査、フィリピンにおける「女性に対する暴力防止」法案制定過程調査、「生殖」や「身体」に関わる政策や「意思決定」に焦点化した考察など。

【プロジェクトD】の目的は、「社会の液状化とグローバル化に即応したジェンダー理論の構築と文化表象の解明」である。現代に即応した文学・視覚表象の研究。「国家」「セクシュアリティ」「精神分析」の問題系をクロスさせて、現在のジェンダー配置に有効な分析枠の模索。東アジアのジェンダー文化表象研究のネットワークの拡大と、英語圏・仏語圏のジェンダー理論の研究と再考、文化表象データベース構築。

### (2) 中間評価結果（コメント）を受けた「統括プロジェクト研究事業」の推進

本拠点研究統合の推進機構として統括研究「ジェンダー研究と〈アジア〉」を設置した。統括研究は、ジェンダー政策、ジェンダー平等指標、理論・表象、アジアの拠点形成の各チームで構成し、ジェンダー研究の新領域形成・発信をおこなうために、横断的かつテーマ抽出的な観点で推進し、研究事業の総まとめをする。

### (3) 本拠点研究事業の成果公表計画

①大規模パネル調査結果を総括して各プロジェクトの研究と連携させ、ジェンダー平等指標の構築および政策の提言をおこなう。

②文化表象データベースを構築して、専門家によって選択・吟味した日本初のジェンダー・データベースとして世界に発信する。

③統括研究「ジェンダー研究と〈アジア〉」は、統括研究の成果を単行本として刊行する。

### (4) 国際シンポジウム、セミナー・ワークショップの開催

プログラム全体、各プロジェクトのレベルで、国際シンポジウム、コロキウム、セミナー、ワークショップ、研究会を開催し、研究集約と成果発信に務め、若手研究者の育成に配慮する。

### (5) 研究成果の発信

①『F-GENSジャーナル』の刊行。

②国内外調査の報告書をPublication Seriesとして刊行。

③学会やNGO/NPOとの共同調査研究報告書を刊行。

④若手ワークショップの記録集、若手研究者ネットワーク論文集を『F-GENSジャーナル特別号』として刊行。

⑤研究成果の単行本を刊行。

⑥英文webサイトの公開。

⑦若手研究者の研究成果の電子アーカイブ化、など。

### (6) 若手研究者の研究支援

①PD研究員の国内外からの公募。

②公募研究の実施と成果の刊行と電子アーカイブ化。

③若手研究者ネットワークの支援と成果の刊行。

④若手研究者による「大学におけるハラスメント研究」の支援。

⑤海外の国際学会の参加と報告を支援。

### (7) アドバイサリー委員会の開催

アドバイサリー委員会を開催し、拠点形成事業の総合評価と今後の展望につき示唆を得る。

## 8. 教育実施計画

本拠点では、高度な研究能力と国際発信力を備えた研究者、グローバルな社会的視座をもった研究者、企画力・コーディネート力・政策提言力をもった研究者として、学問領域を超えて世界のジェンダー課題群に積極的・主体的に取り組む、次世代ジェンダー研究のリーダーとなる人材の育成をめざしている。そのため、下記の教育プロジェクトを推進する。

### (1) 教育プロジェクトの充実

#### ①ジェンダー学際研究専攻の創設

将来的にみた研究人材等の創出については、本学大学院人間文化研究科において、日本初のジェンダー研究を専攻名に掲げた「ジェンダー学際研究専攻」を、平成17年度に創設した。人員・カリキュラムを充実させて、名実ともに学際的なジェンダー研究の展開を図った。また博士前期課程においては、平成18年度に「ジェンダー社会科学専攻」を創設する。さらに平成17年度採択「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「〈対話と深化〉の次世代女性リーダーの育成」において、ジェンダー学際研究専攻は「男女共同参画リソース副専攻」を担当（平成18年度以降）。

②ジェンダー学際研究専攻のカリキュラムの充実。既存の講座に加え、たとえば「ジェンダー国際社会学」や「ジェンダー科学技術論」などのCOE講座の開設

③社会保障・人口問題研究所やアジア経済研究所との連携大学院システムを効果的に展開する事業の推進。

④フィールドワーク、開発実践方法（ケースメソッド）、パネルデータ分析手法の研修、統計セミナーの実施。これらは公開でおこなっている。

⑤研究プロジェクトでの役割強化による多角的な研究視座を獲得した力量ある若手の育成。

⑥ジェンダー研究センターと大学院ジェンダー学際研究専攻の連携による研究能力の向上と、本学院生以外の研究者との共同研究参加の促進

⑦大学院開発・ジェンダー論コース、文教育学部グローバル文化学環等のニーズに応えるテキスト開発

### (2) 国際競争力の強化

国際競争力を強化するため、以下の6点について英語での情報発信や海外のフィールドでの国際比較研究を推進した。

①英語での研究発表の支援プログラムの充実

②国際会議、国際学会での報告への支援と奨励の強化、旅費援助などの支援

③海外調査・資料収集への支援

④海外専門研究者の指導を受ける機会を保障する若手中心型国際ワークショップの継続的開催

⑤若手研究者と学外・国外の研究者との研究交換を図る機会の保障

⑥博士論文等の研究成果の公表、およびその日本語以外の言語による成果発信の促進

### (3) 研究支援システムの充実

①公募研究の実施と成果の刊行

②学内公募によるRA雇用制度による研究環境・経済的基盤の安定化によって、ジェンダー学際研究専攻の人材養成を図る。

③海外留学の人材登用を含めたポストドク研究員国際公募制度

④大学におけるハラスメント研究への支援

⑤F-GENSシンポジウムにおけるポスター・セッション（平成16年度）、若手研究者企画セッション（17年度、18年度、19年度）など研究成果の発信

⑥大学内外に開かれた自主組織「ジェンダー・スタディーズ若手研究者ネットワーク」運営支援と、F-GENSジャーナル特別号による成果発信

### (4) 若手研究者の就職先等、活躍の場の開拓を大学の女性支援プログラムとの連携により推進

本COE採択後の平成16年3月以降の本拠点関連専攻出身の若手研究者の就職先は、本学、一橋大学、東京家政学院大学、東京外国語大学、宇都宮大学、神戸学院大学、東洋大学、立命館大学、日本大学等である。海外では、(韓国)韓神大学準教授、(エジプト)アメリカン大学ジェンダー・女性学センター研究員、(ドイツ)フランクフルト大学女性学・ジェンダー関係研究コーネリア・セントルム研究員など。国内外の大学教員・研究機関への就職の奨励とともに、より広範に男女共同参画社会育成のための活躍の場の開拓を支援する。

### (5) NGO、行政など専門実務家の再教育の実施

本拠点では、すでに、NGO/NPOとの共同研究を推進しているが、今後さらに、行政を含めた専門実務家のプロジェクト・研修への積極的参加を奨励して、専門実務家の再教育に努める。

## 9. 研究教育拠点形成活動実績

### ①目的の達成状況

#### 1) 世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度

目的は概ね達成し、今後の展開への新しい知見を得た。本拠点では、過去5年間の活発な活動を通じて、アジアのジェンダー教育研究拠点を形成した。

##### 【教育活動の活性化】

(1) 日本初のジェンダー研究を冠した「ジェンダー学際研究専攻」(博士後期課程)と「ジェンダー社会科学専攻」(前期課程)を創設し、継続性ある教育環境を整備した。

(2) 上記専攻の院生による国内外の学会発表数は215件(平成17年度)から240件(19年12月)、論文の採択も264件(平成17年度)から362件(18年度)、博士号取得率は採択前35%(平成14年度)から51%(18年度)へと著しく増加した。

(3) 若手中心型国際ワークショップ、海外調査を含む公募研究、PD研究員の国際公募などによる次代研究者の自律的研究の活性化と国際化の推進を図った。

(4) 日本初の組織的な若手ジェンダー研究者ネットワークを形成した(登録者113名)。

##### 【研究水準の実績】

・現代世界の新たな課題群を間アジア的文脈から学際的に検討し、ジェンダー研究の高度な新領域を開拓。具体的には、(1) 再生産領域を中心とした介護・看護労働の国際移転に関する「再生産領域のグローバル化」研究、(2) 身体と生殖医療などに関する「科学・医療・技術と身体のポリティクス」研究、(3) 暴力の構造や主体構成の新局面に着目する「暴力とジェンダー配置」研究。

・今後展開しうる調査結果の集積を実施。(1) 世界初の「北京ジェンダー・パネル」を含む東アジア大規模パネル調査、(2) 日本初のデータベース構築(ジェンダー/セクシュアリティに関する文化表象・理論)。

・以上の成果をもとに、国内では「女性学・ジェンダー研究ネットワーク」を、国際的にはアジアを中心とした学術ネットワークを構築して欧米中心型を脱構築し、多文化・多民族の視点を取り入れた先取的ジェンダー研究を発信した。国際的リーダーシップを発揮できる女性研究者養成に実績をあげ、国内外を通して他には見られないユニークなジェンダー教育研究拠点を形成した。

##### 【外部評価】

国内外の第一線の研究者による外部評価(アドバイ

ザリ委員会)を実施し(平成20年3月)、中間評価後の改善努力により、新領域開拓、アジアからの発信、人材育成、ネットワーク形成において十分な成果をあげたと積極的に評価された。

#### 2) 人材育成面での成果と拠点形成への寄与

多様な教育プログラムおよび研究支援を組織的におこなった結果、着実に成果をあげている。

(1) 若手研究者の主体的な研究プロジェクトへの参画を推進し、研究および研究成果発信の機会を提供した結果、院生等の学術論文発表数は飛躍的に増加した(総論文数1,005本)。国際学会発表数も向上した。

(2) 競争的資金配分による公募研究制度を実施し、研究能力・発信力の強化を図り(総計68件、平均採択率50%)、学位論文執筆や論文投稿促進の基盤となった。

(3) 中間評価による男性のジェンダー研究への参加促進の要請を受けて、男性のPD研究員を国際公募により2名採用し、1名は大学準教授として就職した。

(4) 学内外に開かれた若手研究者の継続的な学術交流の場として、自主的組織「若手研究者ジェンダー・スタディーズ・ネットワーク」が誕生し、研究力と実践力を備えた次代を担うジェンダー研究者のリーダーが育ちつつある。

(5) 「若手中心型ワークショップ」、フィールドワークや統計などの研究・調査スキルの獲得をめざした講座を学内外に開かれた形で開催し、研究力・実践力の向上を図った。

(6) 「英語による国際ワークショップ」、英語力強化セミナーおよび国際会議報告の奨励と支援などをおこなった結果、アジアからの発信が積極化し、若手研究者の自律的研究の活性化が図られた。

(7) 意思決定機関への若手の陪席および「リフレクション・ミーティング」の開催によって、若手の参画によるCOEプログラムの改善をおこなった。

#### 3) 研究活動面での新たな分野の創成や、学術的知見等

アジアから発信するジェンダー研究の新領域の開拓と研究課題の明確化に努めてきた。

本拠点の共同研究を通じて、次の三つの新たなジェンダー研究領域を開拓した。現代世界における重要課題でありながら、既成の学問の枠組みでは解決が困難であり、ジェンダー研究によって捉えなおす必要性がある問題、また、従来のジェンダー研究が必ずしも正面から取り上げてこなかった課題である。すなわち、

「再生産領域のグローバル化」、「科学・医療・技術と身体のパリティクス」および「暴力とジェンダー配置」の三つの新研究領域の開拓である。

(1) 現代のグローバル化をジェンダー分析することにより、再生産領域のグローバル化という最新局面を析出して、「再生産領域のグローバル化」の概念化を成し遂げた。20世紀末以降、日本でも表面化した「格差社会」や「ワーキングプア」がなぜ生じるのか、「再生産領域のグローバル化」の視点による構造分析からより明らかになる。同時に、本研究は、ジェンダーの再配置、再定義化を伴う現象としてグローバル化を分析しており、ジェンダーの新たな定義づけ、および新たな公正と共生に基づくパリティクスを生成する可能性を有する。

(2) ジェンダー研究と「科学・医療・技術」領野の架橋にチャレンジし、新研究領域「科学・医療・技術と身体のパリティクス」を開拓した。テクノサイエンスとして変容を遂げた科学技術による社会構築の問題点について、ジェンダー研究を介して解明を試みた。「テクノサイエンス・パリティクス」という枠組みは、ウェブ世界の解明や現代の女性科学者・技術者研究などに新しい視座を提供する。またゲノム解読後の新たな研究展開のもとで、再生医療など新たな生物医学領域の課題に取り組むことによって、ポスト生物医学時代の医療とジェンダー研究を切り拓いた。

(3) 「暴力とジェンダー配置」という新たなジェンダー研究課題を明確化した。社会の形質変化の予感を感じさせる事件や戦争状況が現代世界に噴出している。子どもの親殺しは、なぜ続出するのか。民族紛争で手段を選ばない殺戮や暴力に人々を駆り立てているものは何か。従来の二項対立的枠組では説明困難な新しい暴力の局面が現出していることに注目し、ジェンダーを軸に形成されてきた近代主体のラディカルな変容の兆しを捉えて、近代主体の欲望と機軸の原理の脱構築をめざし、グローバルな共存の可能性を探った。

(4) 本拠点では、東アジア大規模パネル調査と文化表象データベースの構築をおこなった。中国については初のジェンダー・パネル調査である。日本と同様の少子化傾向を示すが、日本とは異なる男女共同参画政策の展開を見せる韓国、およびグローバル化のもとの急速な市場化が進む中国との比較研究をおこない、経済的自立が男女平等に結びつかないという日本の特徴（「新性別役割分業」）など、新たな知見を得た。また日本で初めてのジェンダー「文化表象データベース-近代社会のジェンダー/セクシュアリティ研究デ

ータベース」を構築した。

#### 4) 事業推進担当者相互の有機的連携

(1) 本拠点は、当初4つの研究プロジェクトと2つの「間プロジェクト」により構成されていたが、アドバイザリ委員会（外部評価）および中間評価の指摘を受けて改善に取り組み、研究体制を再編成した。研究の有機的統合を図るために、統括研究プロジェクト「ジェンダー研究とくアジア」を新設し、その下に4つの研究プロジェクトを再配置した。組織改編後は、毎年開催した全体シンポジウム「F-GENSシンポジウム」を中心とした統括研究プロジェクトの活動を通して、アジアから発信するジェンダー研究の新領域の開拓と研究課題の明確化および研究の集約に努めてきた。

(2) F-GENSシンポジウムは、プログラム全体の共同研究の進捗状況に合わせて、「問題提起型」「中間報告型」「研究集約型」「成果発信型」という企画方針を示して開催し、各プロジェクトの研究成果の共有と統合を図った。ポスト冷戦期におけるホットスポットとしてのアジア認識・分析の意義、近代的枠組みの変容と家族の境界の融解、再生産のグローバル化というグローバル化の最新局面など、フェミニズム・パリティクスの「岐路」におけるジェンダー課題を共有した。

#### 5) 国際競争力ある大学づくりへの貢献度

拠点形成事業を通じて、ジェンダー研究センターの長年の蓄積を基盤に、アジアを中心として、国際的学術ネットワークをさらに強化した。本事業を通してネットワークを形成した研究機関、研究者は多数に上る。アジア工科大学院大学とは大学間協定を締結し、シンガポール国立大学とは二国間交流事業共同研究を進めた。パネル調査では中国人民大学と、日韓シンポジウムでは韓国梨花女子大学と共同事業をおこなった。このような基盤の上に、「アジア太平洋地域女性ネットワーク：お茶の水女子大学バンコク事務所」が開設された。また海外の大学・研究機関への院生の就職が増加したことも、国際競争力強化への貢献と言える。

#### 6) 国内外に向けた情報発信

研究成果は、主に次の4つのかたちで発信した。

(1) 本拠点形成事業の集大成として、シリーズ『ジェンダー研究のフロンティア』全5巻を刊行した（作品社）。本拠点が開拓した三つの新研究領域を基軸に据える構成とした。事業推進担当者・客員研究員などに加えて若手研究者も執筆した。研究成果を広く発信す

ることで、日本およびアジアにおけるジェンダー研究のフロンティア開拓に貢献することができた。

(2) 学術雑誌『F-GENSジャーナル』全11冊を刊行した。毎年1回、活動の総括をおこなって、その年度の研究教育活動の成果と課題を明らかにした。最終号は「ファイナル・レポート」として本事業の総括と展望をおこない、「英語版Final Report」も刊行した。また公募研究の成果については、特集号を年1回刊行した(計4冊)。さらに若手研究者の自主的組織である「若手研究者ジェンダー・スタディーズ・ネットワーク」企画・編集の「若手研究者特集号」を刊行した。なお『ジャーナル』掲載の本学所属教員および院生の研究論文は、大学HPに順次電子公開されている。

(3) Publication Seriesを全34冊発行した。パネル調査の国別年次報告書、若手中心型国際シンポジウム等のプロシーディングス、国際ワークショップ、日韓会議プロシーディングズ(二カ国語)、海外調査、若手支援プログラムなどの報告書など(英文報告書は5冊)。

(4) Webを通じた成果の発信(日本語および英語)

## 7) 拠点形成費等補助金の使途について(拠点形成のため効果的に使用されたか)

(1) 拠点運営を管理するため、事業推進担当者と事務担当者による「COE事務局」を組織し、事務局長と会計担当者を置いた。拠点形成計画を実現するために年度予算計画を作成した。会計担当者が随時、予算執行状況を把握し、事務局会議で毎月、報告、点検した。

(2) プログラム初年度は、研究環境整備のための経費を中心とした予算計画を立案し、若手研究者支援の公募研究助成金制度を開始したほか、若手研究者向けのワークショップを開始した。

(3) 第2年度には、研究プロジェクトの本格化にあたり、事務局強化のため人件費を増額した。また全体シンポジウムの開催や外部評価の実施など、事業の充実を図る予算計画を実施した。

(4) 第3年度には、PD研究員雇用などの若手研究者支援プログラムの充実を図り、博士後期課程「ジェンダー学際研究専攻」の創設にあたり、大学院関連の経費を充実させた。

(5) 第4年度は、研究の統合を図るために統括プロジェクト予算を立て、また若手研究者ネットワークの発足に伴う活動支援やポスト研究員の増員をおこなった。若手研究者支援の予算の増額は、間接経費の新設によって、一般管理費のうち事務局員人件費の一部を間接経費から支出可能になったことによる。

(6) 最終年度には、これまでの研究成果の刊行やオンライン公開のための支出を重点においた予算案を立てて、年度内にそれらを実施した。第2年度に実施した外部評価を受けて、院生雇用経費と若手支援教育事業などに毎年多くの予算をあてることとし、それによって、21世紀COEプログラムの趣旨に沿った成果をあげる補助金使用ができたと考える。

## ②今後の展望

本拠点形成事業の成果を踏まえつつ、大学院博士後期課程のジェンダー学際研究専攻、比較社会文化学専攻、ジェンダー研究センターを中心に、以下の教育研究事業を持続的に展開する拠点を引き続き運営する。

(1) アジアにおけるジェンダー研究教育の拠点としての役割を、さらに環太平洋に拡大し、21世紀のジェンダー課題の分析と政策提言を、国際的に発信する。

(2) 新研究領域として開拓した「再生産領域のグローバル化」「科学・医療・技術と身体のポリティクス」「暴力とジェンダー配置」にとくに焦点をあてる。

(3) 本拠点で構築した海外学術ネットワークをさらに充実・拡大させ、次世代ジェンダー研究者の国際的な研究活動を多局面に渡って支援していく。

(4) 国内学術ネットワーク「ジェンダー研究・女性学ネットワーク」を形成・推進し、男女共同参画社会実現に向けて学術的知見を醸成する。

## ③その他(世界的な研究教育拠点の形成が学内外に与えた影響度)

(1) 海外機関との学術ネットワーク形成による共同教育研究の国際的な活性化(シンガポール国立大学との高齢社会共同研究、梨花女子大学と共催の日韓女性会議の運営、アジア工科大学院大学との教育交流、中国人民大学とのパネル調査、お茶の水女子大学バンコク事務所開設)。

(2) 世界第一線の研究者を含む多数の海外研究者との共同研究を通じたジェンダー課題群の抽出による学内外のジェンダー研究の高度化(J.Butlerら101名)。

(3) ジェンダー研究の基盤的研究資源の構築と供給(東アジアのジェンダー・パネル調査、文化表象データベース構築など)。

(4) 国や自治体の男女共同参画行政への貢献(DV政策・ワークライフバランス政策など)。

(5) 国内のジェンダー研究ネットワークの組織化。

(6) ジェンダー研究を主軸にした専攻の創設により、学内の教育環境の更なる充実と研究環境への提言。

21世紀COEプログラム 平成15年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	お茶の水女子大学	拠点番号	J07
拠点のプログラム名称	ジェンダー研究のフロンティア - <女> <家族> <地域> <国家> のグローバルな再構築 -		
<p>1. 研究活動実績</p> <p>この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】</p> <p>〔 著書、公刊論文、学術雑誌、その他当該プログラムにおいて公刊したもの 〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本拠点形成計画の成果で、ディスカッション・ペーパー、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるもの著者名(全員)、論文名、著書名、学会誌名、巻(号)、最初と最後の頁、発表年(西暦)の順に記入</li> <li>波下線( ) : 拠点からコピーが提出されている論文</li> <li>下線( ) : 拠点を形成する専攻等に所属し、拠点の研究活動に参加している博士課程後期学生</li> </ul> <p><b>【事業推進担当者が事業実施期間中に既に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文等】</b></p> <p>戒能民江(編著)『&lt;ジェンダー研究のフロンティア&gt;第1巻: 国家/ファミリーの再構築 人権・私的領域・政策』作品社、2008.</p> <p>戒能民江「セクシュアル・ハラスメントの司法的救済とその限界」『F-GENSジャーナル』第7号、pp.214-221、2007.</p> <p>戒能民江(編著)『DV防止とこれからの被害当事者支援』ミネルヴァ書房、2006.</p> <p>戒能民江「日本における女性の人権政策課題」『F-GENSジャーナル』第3号、pp.81-85、2006.</p> <p>戒能民江「ジェンダー法学と暴力の再解釈 ジェンダー研究のフロンティアに向けて」『F-GENSジャーナル』第3号、pp.24-30、2005.</p> <p>伊藤るり、足立真理子(共編著)『&lt;ジェンダー研究のフロンティア&gt;第2巻: 国際移動と 連鎖するジェンダー 再生産領域のグローバル化』作品社、2008.</p> <p>伊藤るり「『国際商品』化される家事・介護労働とその「技能」の承認 矛盾と逆説」『F-GENSジャーナル』第7号、pp.74-81、2007.</p> <p>Ruri Ito, "Crafting Migrant Women's Citizenship in Japan: Taking "Family" as a Vantage Point," <i>International Journal of Japanese Sociology</i>, No. 14, pp.52-69, 2005.</p> <p>伊藤るり、小ヶ谷千穂、ブレンダ・テネグラ、稲葉奈々子「いかにして&lt;ケア上手なフィリピン人&gt;はつくられるのか? ケアギバーと再生産労働の『国際商品』化」『F-GENSジャーナル』第3号、pp.269-278、2004.</p> <p>伊藤るり「ジェンダー主流化と『女性支援』」総合研究開発機構、武者小路公秀、遠藤義雄編著『アフガニスタン 再建と復興への挑戦』日本経済評論社、pp.246-274、2004.</p> <p>足立真理子「再生産領域のグローバル化と世帯保持(householding)」伊藤るり、足立真理子(共編著)『&lt;ジェンダー研究のフロンティア&gt;第2巻: 国際移動と&lt;連鎖するアジア&gt;-再生産領域のグローバル化』作品社、pp.224-262、2008</p> <p>足立真理子、伊田久美子、木村涼子、熊安喜美江(編)『フェミニスト・ポリティクスの新展開: 労働・ケア・グローバリゼーション』明石書店、2007.</p> <p>足立真理子「再生産領域のグローバル化と世帯組織保持(householding)」『F-GENSジャーナル』第7号、pp.63-67、2007.</p> <p>足立真理子「再生産領域のグローバル化と複数のグローバリゼーション(multiple globalizations)」『F-GENSジャーナル』第3号、pp.110-113、2005.</p> <p>足立真理子「グローバリゼーションへのフェミニスト分析: 弛緩と越境」木前利秋(編)『現代社会の諸相』お茶の水書房、pp.105-120、2005.</p> <p>熊谷圭知「ジェンダーと開発における男性の位置・再考」戒能民江(編著)『&lt;ジェンダー研究のフロンティア&gt;第1巻: 国家/ファミリーの再構築 人権・私的領域・政策』作品社、pp.207-229、2008.</p> <p>熊谷圭知「差異を越えて ローカル・センシティブな開発とジェンダーの行方」『F-GENSジャーナル』第10号、pp.34-40、2008.</p> <p>熊谷圭知「『ジェンダーと開発』における男性の位置」『F-GENSジャーナル』第5号、pp.337-346、2006.</p> <p>熊谷圭知「経済地理学は『貧困』にどう向き合うのか? モラルエコノミーと地域の学としての再構築」『経済地理学年報』第49巻第5号、pp.445-466、2003.</p> <p>篠塚英子、永瀬伸子(共編著)『&lt;ジェンダー研究のフロンティア&gt;第3巻: 少子化とエコノミー パネル調査で描く東アジア』作品社、2008.</p> <p>篠塚英子「ダイアン・エルソン『新自由主義的なグローバル化とジェンダー平等』をめぐって」『F-GENSジャーナル』第10号、pp.237-242、2008.</p> <p>篠塚英子「女子学生のキャリア志向とグローバル社会への適応」お茶の水女子大学『人文科学研究』第4号、pp.127-140、2008.</p> <p>篠塚英子・加賀美登美代「グローバル社会への関心と女子学生のキャリア志向」お茶の水女子大学『人文科学研究』第3号、pp.159-174、2007.</p> <p>篠塚英子(編著)『女性リーダーのキャリア形成』勁草書房、2004.</p> <p>永瀬伸子「テクノロジー、労働と再生産 北京、ソウルと日本の比較」『F-GENSジャーナル』第7号、pp.81-85、2007.</p> <p>永瀬伸子「少子社会と女性の労働供給-新しいルールの模索」小峰隆夫、連合総合生活開発研究所(編)『人口減・少子化社会の未来-雇用と生活の質を高める』明石書店、pp.83-102、2007.</p> <p>Nobuko Nagase, "Japanese Youth's Attitudes Towards Marriage and Child-Rearing," Mark Rebeck and Ayumi Takenaka eds., <i>Economic Change and Japanese Families</i>, Routledge, 2006.</p> <p>永瀬伸子、村尾裕美子「社会保障や税制等は家族・家族形成に影響を与えるか 日本の社会的保護の仕組みが持つ特定タイプの家族へのバイアス」『季刊社会保障研究』第41巻第2号、pp.137-149、2005.</p> <p>御船美智子「夫妻の経済関係 共同性と格差」篠塚英子、永瀬伸子(共編著)『&lt;ジェンダー研究のフロンティア&gt;第3巻: 少子化とエコノミー パネル調査で描く東アジア』作品社、pp.171-188、2008.</p> <p>御船美智子「自立と共同性 家計をめぐるポリティクス」『F-GENSジャーナル』第10号、pp.40-46、2008.</p> <p>御船美智子、家計経済研究所(編著)『家計研究へのアプローチ』ミネルヴァ書房、2007.</p> <p>御船美智子「女性の金融資産と住宅所有」家計経済研究所『女性のライフコースと住宅所有』家計経済研究所、pp.71-89、2006.</p> <p>御船美智子「家計内資源配分とジェンダー不平等」篠塚英子「家計内配分とジェンダー統計の研究」報告書 pp.5-12、2006.</p> <p>水野勲「職場と住居の空間的關係と家族」篠塚英子、永瀬伸子(共編著)『&lt;ジェンダー研究のフロンティア&gt;第3巻: 少子化とエコノミー パネル調査で描く東アジア』作品社、pp.134-151、2008.</p> <p>水野勲「朝鮮半島の都市的集落の存立基盤」石原潤、山田誠編著『アジアの歴史地理 第2巻: 都市と農地景観』朝倉書店、pp.128-134、2008.</p> <p>水野勲「時間地理学と生活時間研究を結ぶもの F-GENSパネル調査の経験から」『F-GENSジャーナル』第7号、pp.238-244、2007.</p> <p>館かおる(編著)『&lt;ジェンダー研究のフロンティア&gt;第4巻: テクノ/バイオ・ポリティクス 科学・医療・技術のいま』作品社、2008.</p> <p>館かおる「Web世界での『ジェンダー』の位相」『F-GENSジャーナル』第7号、pp.86-92、2007.</p> <p>館かおる、小山直子「Web世界の『ジェンダー』」館かおる(編著)『&lt;ジェンダー研究のフロンティア&gt;第4巻: テクノ/バイオ・ポリティクス 科学・医療・技術のいま』作品社、pp.73-92、2008.</p> <p>Naoko Oyama, Yoshifumi Masunaga and Kaoru Tachi, "A Diachronic Analysis of Gender-Related Web Communities Using a HITS-Based Mining Tool," X. Zhou et al.(eds.) <i>Frontiers of WWW Research and Development-APWeb 2006</i>, Springer, pp.355-366, 2006.</p> <p>小山直子、館かおる、増永長文「ジェンダー関連Webコミュニティの通時的分析 Webマイニングツールを使用して」『F-GENSジャーナル』第3号、pp.306-311、2005.</p>			

- 小川真理子「科学技術におけるアジアの女性科学者技術者」館かおる(編著)『<ジェンダー研究のフロンティア>第4巻:テクノ/バイオ・ポリティクス 科学・医療・技術のいま』作品社、pp.121-141、2008.
- Mariko Ogawa, "Women's Careers in Science and Technology in Japan," *Women in Scientific Careers: Unleashing the Potential*, OECD, pp. 87-94, 2006.
- Mariko Ogawa, "To Become a Woman Doctor in Early Meiji Japan (1868-1890): Women's Struggles and Ambitions," (Patessio & Ogawa) *Historia Scientiarum*, vol.15, no.2, pp.159-176, 2005.
- 小川真理子「ロング・シービングの科学史・科学政策研究」『F-GENSジャーナル』創刊号、pp.155-164、2004.
- 小川真理子『甦るダーウィン—進化論という物語り』岩波書店、2003.
- 柘植あづみ「生物医学に対するジェンダー・アプローチのフロンティア」館かおる(編著)『<ジェンダー研究のフロンティア>第4巻:テクノ/バイオ・ポリティクス 科学・医療・技術のいま』作品社、pp.272-184、2008.
- 柘植あづみ「遺伝化された生を越える」柘植あづみ・加藤秀一(共編著)『遺伝子技術の社会学』文化書房博文社、pp.183-221、2007.
- 柘植あづみ「生殖技術に対する生命倫理の課題の再考」『生命倫理』第16巻第1号、日本生命倫理学会、pp.35-41、2006.
- 柘植あづみ「人口政策に組み込まれる不妊治療」『国際ジェンダー学会誌』第3号、国際ジェンダー学会、pp.9-34、2005.
- 柘植あづみ「終末期医療をめぐる争い テリ・シャイボの事例が映すアメリカの現在」『思想』第976号、岩波書店、pp.45-61、2005.
- 武藤香織「DNA親子鑑定は「ふいだらな」女性にとっての救済策か?」館かおる(編著)『<ジェンダー研究のフロンティア>第4巻:テクノ/バイオ・ポリティクス 科学・医療・技術のいま』作品社、pp.238-264、2008.
- 武藤香織「遺伝とエンパワメント 当事者団体の果たす役割」『助産雑誌』第59巻第2号、医学書院、pp.124-129、2005.
- 武藤香織、黒田幸代「全国自治体における不妊専門相談センター事業に関する現状調査」『助産雑誌』第59巻第10号、医学書院、pp.930-935、2005.
- 武藤香織「ALSとジェンダー」植竹日奈ほか(編)『人工呼吸器をつけますか? ALS・告知・選択』メディカ出版、pp.124-136、2004.
- 武藤香織「『家族愛』の名のもとに—生体肝移植と家族」、『家族社会学研究』第14巻第2号、pp.128-138、2003.
- 原ひろ子「学術領域における男女共同参画と学術の再構築」財団法人日本学術協力財団編・発行『学術会議叢書14:性差とは何か』pp.15-24、2008.
- 原ひろ子「女性・男性の健康の展望 日本の指標と国際的な動向」北九州市立男女共同参画センター・ムーブ(編)『ジェンダー白書6:女性と健康』明石書店、pp.152-166、2008.
- Hiroko Hara, "Academics and their Family Life: Based on a Survey Conducted in fiscal 1996-1997," in Hiroko Hara (ed.) Report on the Special Session Focused on Academic Pursuit and Family Life in the SCA Joint Project Workshop(Gender): A Comparative Study of the Research Conditions of Women Scientists, Gender Issues in S & T, and the Present Conditions of Women's/Gender Studies in Asian Countries towards Human Centered Sustainable Development, Published by the Science Council of Japan, pp.39-57, 2007.
- 原ひろ子『次世代育成を考える』放送大学教育振興会、2003.
- 波平恵美子「身体・医療・ジェンダー」館かおる(編著)『<ジェンダー研究のフロンティア>第4巻:テクノ/バイオ・ポリティクス 科学・医療・技術のいま』作品社、pp.174-178、2008.
- 波平恵美子「主張する<身体>と注目の多い<遺体>」鷲田精一他(編)『身体をめぐるレッスン4 交叉する身体』岩波書店、pp.229-254、2007.
- 波平恵美子「沖縄における性教育の政策的課題」『F-GENSジャーナル』第5号、pp.92-96、2006.
- 波平恵美子『からだの文化人類学 変貌する日本人の身体観』大修館書店、2005.
- 波平恵美子『日本人の死のかたち』朝日新聞社、2004.
- 竹村和子「生と死のポリティクス—暴力と欲望の再配置」竹村和子(編著)『<ジェンダー研究のフロンティア>第5巻:欲望・暴力のレジーム—揺らく表象/格闘する理論』作品社、pp.238-254、2008.
- 竹村和子(編著)『<ジェンダー研究のフロンティア>第5巻:欲望・暴力のレジーム 揺れる表象/格闘する理論』作品社、2008.
- 竹村和子「デリダの贈与【脱構築/ポリティクス/ポスト性的差異】」『環』第13号(デリダ特集号)、pp.342-353、2007.
- Kazuko Takemura, "Pure Love" and Constitutional Amendments: Yukio Mishima and Today's Cinematization of His Novel," *F-GENS Journal* no.5 pp.97-103, 2006.
- 竹村和子「対抗テロリズム小説は可能か」『アメリカ研究』第40号、日本アメリカ学会、pp.19-37、2005.
- 天野知香「視覚「芸術」における身体?フェミニズムによる美術史の再検討」竹村和子(編著)『<ジェンダー研究のフロンティア>第5巻:欲望・暴力のレジーム 揺らく表象/格闘する理論』作品社、pp.23-44、2008.
- 天野知香「マティス研究の現在から二、三の批判的考察」永井隆則(編)『フランス近代美術史の現在』三元社、pp.275-316、2007.
- 天野知香「アカデミー・マティスの女性画家 マリー・ヴァシリエフ」『科研費研究成果報告書:近代日本の女性美術家と女性像に関する研究』pp.42-80、2007.
- 天野知香「"アール・デコ"と他者の身体」鈴木杜幾子、馬淵明子、池田忍、金恵信(編著)『交差する視線 美術とジェンダー2』ブリュッケ、pp.315-345、2005.
- 天野知香「過程にある絵画」天野知香、田中正之、読売新聞東京本社文化事業部(編)『マティス Processus / Variation』国立西洋美術館、pp.8-24、2004.
- 石塚道子「『世帯』のモビリティと集合性—カリブ海地域の世帯集合「ヤード」と「ラクー」の事例から」伊藤るり、足立真理子(共編著)『<ジェンダー研究のフロンティア>第2巻:国際移動と連鎖するジェンダー 再生産領域のグローバル化』作品社、pp.199-223、2008.
- 石塚道子、田沼幸子、富山一郎(編著)『ポスト・ユートピアの人類学』人文書院、pp.1-381(分担第一部「地に呪われた者は起ち上がったのか マルティニク脱植民地プロジェクト」pp.71-110)、2008.
- 石塚道子「クレオール文化空間の脱植民地戦略—マルティニクにおける相反的な空間認識をめぐって」『文化人類学』第72巻第4号、pp.485-503、2008.
- 石塚道子「カリブ海地域における小規模農業とジェンダー 内部市場売買システム再考」『F-GENSジャーナル』第10号、pp.192-197、2008.
- 石塚道子「カリブ海地域の女性たちの『語り』」鈴木真一郎、東塚磨(編)『シンクペーション ラティノ/カリビアン文化実践』エディマン、pp.105-115、2003.
- 菅聡子「暴力の表象/表象の暴力 欲望の再生産とメディア」竹村和子(編著)『<ジェンダー研究のフロンティア>第5巻:欲望・暴力のレジーム 揺らく表象/格闘する理論』作品社、pp.154-168、2008.
- 菅聡子「国家と女学生 東京女子高等師範学校を事例として」お茶の水女子大学『人文科学研究』第4巻2007年版、pp.41-51、2008.
- 菅聡子「女性同士の絆 近代日本の女性同性愛」お茶の水女子大学国語国文学会『国文』第106号、pp.24-39、2006.
- 菅聡子「女手 の叛逆者 田辺聖子論」『田辺聖子全集 別巻1』集英社、pp.359-420、2006.
- 菅聡子「樋口一葉と 和歌」勝原晴希(編)『和歌をひらく第五巻:帝国の和歌』岩波書店、pp.113-133、2006.
- 拠点全体の研究報告書および公開図書**
- 『F-GENS ジャーナル』No.1~No.11、ジェンダー研究のフロンティア(F-GENS)、2004~2008。(全11冊)
- 『F-GENS パブリケーションシリーズ』Publication Series 1~34、ジェンダー研究のフロンティア(F-GENS)、2004~2008。(全34冊)
- シリーズ『<ジェンダー研究のフロンティア>』第1巻~第5巻、作品社、2008。(全5冊)
- 【本拠点形成事業の成果で速報性のあるもの】**
- 中矢由花、金玟姪、菅聡子、黒岩裕市、菅野貴子、竹内栄美子、竹内佳代、河原塚瑞穂、浅野麗、倉田容子、大塚美穂、内海紀子、高崎みどり、池内靖子共著『文化表象を読む—ジェンダー研究の現在』F-GENS、2008.
- Keichi Kumagai, Ayami Nakatani, Keiko Hirano, Orié Kimura, Keiko Ikeda, Michiko Ono, Mine Sato, Kumiko Shuto, Yukiko Nakamura, Minako Kuramitsu, Toru Miura, Junko Toriyama, Yoko Fujikake, Hiroko Minesaki, Mayuko Sano and Mayumi Murayama, [Proceedings of International Workshop for Junior Scholars] *Beyond the Difference: Repositioning Gender and Development in Asian and the Pacific Context*, F-GENS Publication Series 32, 2008.

## 国際会議等の開催状況【公表】

(事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数(うち外国人参加者数)、主な招待講演者(3名程度))

## 【国際会議・シンポジウム】

- 2003年11月15日 シンポジウム「ジェンダー研究の理論と表象分析のいま：国家・資本・表象の共謀と攻防」【参加者数】239名(17名)  
【主な招待講演者】牟田和恵(大阪大学) 吉見俊哉(東京大学) Keith Vincent(ニューヨーク大学)
- 2004年1月10日 国際シンポジウム「遺伝子・身体・女と政治：ポスト・ヒトゲノムプロジェクト時代の科学・医学をジェンダーで再考する」【参加者数】95名(11名)【主な招待講演者】Rayna Rapp(ニューヨーク大学) Margaret Sleeboom(ライデン大学アジア研究所) 加藤秀一(明治学院大学)
- 2004年2月21日 国際シンポジウム「科学技術政策とジェンダー(Promoting gender equality in European scientific research)」【参加者数】50名(3名)【主な招待講演者】Nicole Dewandle(ヨーロッパ連合研究総局「女性と科学」部長) 小館香椎子(日本女子大) 守屋朋子(富士通SSL取締役)
- 2004年12月11～12日 第1回F-GENSシンポジウム「グローバル化、暴力、ジェンダー」【参加者数】400名(20名)  
【主な招待講演者】Anne Cubilié(国連人道調整局) ヤン・ヒョナ(ソウル国立大学) 王琪延(中国人民大学)
- 2005年1月26日 国際会議「お茶の水女子大学COE東アジアパネル調査に関する国際会議」【参加者数】42名(10名)  
【主な招待講演者】李基栄(ソウル大学) 趙熙今(大邱大学) 趙彦云(中国人民大学応用統計センター)
- 2005年11月5～6日 第2回F-GENSシンポジウム「ポスト冷戦期のアジアとジェンダー研究」【参加者数】498名(30名)  
【主な招待講演者】戴錦華(北京大学) Tani E. Barlow(ワシントン大学) Vera Mackie(メルボルン大学)
- 2006年1月7日 アジア認識とジェンダー研究会シンポジウム「東アジアの『戦後』60年：軍事化とセクシュアリティ」【参加者数】50名(5名)【主な招待講演者】権仁淑(明知大学校[韓国]) 山下英愛(立命館大学) 小浜正子(日本大学)
- 2006年6月4日 シンポジウム「リプロダクティブ・ヘルス/ライツと女性に対する暴力の根絶：フィリピンと日本の政策形成過程から」【参加者数】50名(3名)【主な招待講演者】Carolyn Israel Sobritchea(フィリピン大学女性学研究センター) 堂本暁子(千葉県知事) 大津恵子(元HELPディレクター)
- 2006年7月24～25日 (於：韓国・梨花女子大学) 国際シンポジウム「歴史・国家・女性：韓日比較女性史のための試み」  
【参加者数】75名(50名)【主な招待講演者】キム・ウンシル(梨花女子大学) キム・スジン(延世大学) ヤン・ヒョナ(ソウル国立大学)
- 2006年11月18～19日 第3回F-GENSシンポジウム「家族の境界：表象・身体・労働の政治」【参加者数】307名(8名)  
【主な招待講演者】ビョン・ファスン(韓国女性開発院) 岡野八代(立命館大学) 荻野美穂(大阪大学)
- 2007年2月3日 シンポジウム「ファン・ウソク事件と女性の資源化」【参加者数】41名(2名)  
【主な招待講演者】Song Bong Hee & Park Jung Ok(韓国・女性民友会) 金凡性(日本学術振興会研究員)
- 2007年7月14日 非公開研究者会議「スピヴァク・コロキウム」(国際文化会館・牛場フェローシップと共催)  
【参加者数】70名(3名)【招待講演者】Gayatri C. Spivak(コロンビア大学)
- 2007年8月29～30日 国際シンポジウム「文化表象の政治学：日韓女性史の再解釈」(梨花女子大学と共催)【参加者数】169名(20名)  
【主な招待講演者】キム・ウンシル(梨花女子大学) 金英善(梨花女子大学) 金ヒョンミ(延世大学)
- 2007年11月24日 (於：国際能力開発支援センター)「東アジアにおけるDV法の現状と課題」【参加者数】80名(3名)  
【主な招待パネリスト】王麗容(台湾国立大学) イ・ホジュン(韓国西江大学) 長谷川京子(弁護士)
- 2007年12月7～9日 (於：一橋大学) 国際シンポジウム「再生産領域のグローバル化とアジア」【参加者数】180名(30名)  
【主な招待講演者】Shirlena Huang(シンガポール国立大学) Brenda Yeoh(シンガポール国立大学) 上野千鶴子(東京大学)
- 2007年12月16日 国際シンポジウム「『男性同性愛者』のセクシュアリティから『男性』ジェンダーを見る」【参加者数】97名(2名)【主な招待講演者】Gilbert Herdt(カリフォルニア州立大学) 市川誠一(名古屋市立大学) 風間孝(中京大学) 北仲千里(広島大学)

## 【海外招聘講師による講演会】

- 2003年9月22日 Eli Bartra(メキシコ市立自治大学)「メキシコの女性とフォークアート」【参加者数】20名
- 2003年10月6日 Trinh T. Minh-ha(カリフォルニア大学バークレー校) 新作映画上映会&講演会【参加者数】160名
- 2004年3月6日 李小江(大連大学)「戦争体験とジェンダー：北東アジアの女性口述史研究から」【参加者数】150余名
- 2004年10月11日 Estelle Freedman(スタンフォード大学)  
「No Turning Back: The History of Feminism and the Future of Women」【参加者数】59名
- 2004年11月27日 Judith Halberstam(南カリフォルニア大学)  
「The Contradictions of Female Masculinity Before and After Abu Grahیب」【参加者数】140名(学外科研費プロジェクト「近現代日本における男性性(マスキュリティーズ)の構築家過程についての学際的研究」との共催)
- 2004年11月27日 Rhacel S. Parreñas(カリフォルニア大学デイヴィス校)  
「Caring for the Filipino family: How gender differentiates the economic causes of labor migration」【参加者数】26名
- 2004年12月18日 Londa Schiebinger(スタンフォード大学)  
「エキゾチックな中絶薬：18世紀大西洋世界の植物をめぐるジェンダーポリティクス」【参加者数】55名
- 2005年7月22日 Amie Williams(映画製作者・監督・脚本家)「女性映像作家 Film & Talk」【参加者数】55名
- 2006年1月14日 Judith Butler(カリフォルニア大学バークレー校) 講演会「Undoing Gender」【参加者数】801名
- 2006年1月16日 Griselda Pollock(リーズ大学)「Visions of Sex: Wanderings in a Virtual Feminist Museum ca.1920」【参加者数】140余名
- 2006年10月8日 Joan Copjec(ニューヨーク州立大学バッファロー校)「The Descent into Shame」【参加者数】63名
- 2007年7月27日 申京淑(韓国の作家)「津島佑子+申京淑 公開トーク「書くこと・語ること」」【参加者数】60名
- 2007年11月9日 多和田葉子(ドイツ在住日本人作家)「エクソフォニーをめぐる旅」【参加者数】47名

〔場所：記載がない場合はお茶の水女子大学において開催〕

## 2. 教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

本拠点では、1) 高度の研究能力と国際的な発信力、2) グローバルな社会的視座、3) 企画力、コーディネート力、政策提言力を持ち、学問領域を超えたジェンダー課題群に主体的に取り組む人材の育成に努めてきた。教育的効果を高めるために、本拠点では、若手研究者支援プログラムは、1) 研究支援、2) 教育プログラム、3) 国際競争力強化支援に取り組んできた。

この結果、事業推進担当者の指導を受けた院生及び若手研究者の研究生産性は向上し、論文採択数は平成17年の264件から平成18年の362件へ、国内外の学会発表数は平成17年の215回から平成19年の240回へと増加した。

### (1) 研究支援

#### 公募研究制度

研究能力および発信力を強化し、COE事業へのコミットメントを深めるために、公募研究制度を平成15年度から平成18年度まで毎年実施した。本学大学院在籍者および本学の研究センターに研究拠点を置く者(公募のPD研究員を含む)を対象として、三段階の審査による競争的な研究資金配分を行なった(総計68件)。平均採択率は50%。

実施状況は、平成15年度：申請者37名、採択者21名、補助金総額9,975千円、平成16年度：申請者35名、採択者14名、補助金総額4,970千円、平成17年度：申請者35名、採択者14名、補助金総額5,000千円、平成18年度：申請者29名、採択者19名、補助金総額5,000千円である。

研究成果については、報告書と論文の提出を義務付け、提出論文は査読を経て、F-GENSジャーナル公募特集号に掲載した(計4冊刊行)。

#### リサーチ・アシスタント(RA)雇用制度

RAの平成15年度から平成19年度の雇用実績は、年度順に15名、20名、18名、26名、29名であった。

#### ポスドク(PD)国際公募制度

PD研究員(週24時間勤務)の国際公募は、アドバイザー委員会の提言の下、平成17年度より実施し、計4名を採用した。中間評価のコメントを受けて、男性のPD研究員を2名採用した。なお、学内外の博士号取得者をCOE研究員として雇用した(延べ22名)。

#### 若手研究者プロジェクト「大学におけるハラスメント研究」支援

大学としてもジェンダー研究としても重要な研究であり、独立のプロジェクトを組織して研究を支援した。

#### 自主的な「若手研究者ジェンダー・スタディーズ・ネットワーク」(JSGS-Net)活動支援

若手研究者からの要望を受けて全体シンポジウムで若手企画セッションを設けた(平成17年度)。それらの活動を契機に学内外に開かれた若手研究者の継続的な学術交流の場が自主的組織として誕生し、活動支援をおこなった。

### (2) 教育プログラム

#### 若手中心型ワークショップ

若手研究者の研究スキルの向上をめざし、公募により若手研究者が中心となって報告をおこない、第一線の専門家と学術的交流をおこなった。計6回、若手の参加者数は延べ50名であった。

#### 研究・調査スキルの獲得をめざした講座の開催

- \* フィールドワークの手法と実践を学ぶために、フィールドワーク講座を開催(計4回、参加者数は計176名)
- \* 統計ソフト実習や研究デザイン、データの分析手法などを学ぶために、統計講座を実施(計3回、参加者数は計81名)
- \* ケース・メソッド・セミナー開催(1回、参加者数29名)
- \* 生活史カレンダー調査ワークショップ開催(計2回、参加者数40名)

### (3) 国際競争力の強化

「英語による国際ワークショップ」実施海外から研究者を招聘して公募した報告者が英語で報告し、質疑応答(計3回、報告者28名)。

「英語力強化セミナー」実施 英文論文セミナーおよび英語プレゼンセミナーをおこない、英語による発信力の強化に努めた。

その他、海外での国際会議や学会での報告の奨励と旅費支援を実施した。とくに、平成17年開催の第9回国際学際的女性会議(ソウル)には競争的資金配分による旅費支援をおこなった(報告7名)。また日韓シンポジウムを東京、ソウルで交互に開催し、院生が企画・運営の中心的役割を果たした。これらによって、アジアからの発信が積極化し、若手研究者の自律的研究の活性化が図られた。

21世紀COEプログラム委員会における事後評価結果

(総括評価)

設定された目的は十分達成された

(コメント)

拠点形成計画全体については、ジェンダー研究の理論・事例研究両面において、ジェンダーと暴力、ジェンダーと科学・技術など新しい課題の開拓を進め、東アジアパネル調査のデータ蓄積を実施し、体系的かつ意欲的に拠点形成計画を展開しており、設定された目的は十分達成されたと評価できる。

人材育成面については、RA（リサーチ・アシスタント）の積極的な参加を募り、若手研究者支援や国際化支援に取り組み、大学院教育で数多くの若手研究者を育成し、他大学からの参加や男性学生の参加も含めて、ジェンダー研究の展開と普及に積極的な貢献を行ったことは高く評価できる。

研究活動面については、4つの研究プロジェクトを柱に、活発な研究活動を持続し、成果を取りまとめて公開を進め、アジア、特に東アジアにおける研究協力ネットワークを構築し、世界的な拠点であるための基盤としてアジア地域における本拠点の実力を積極的に培ったことは高く評価できる。

補助事業終了後の持続的展開については、ジェンダー研究が質量ともに拡大し、ジェンダー研究に携わる研究者や研究機関も多様化する現在、ジェンダー研究は領域を横断する基礎的な学問として自らを確立すべき時期となっているが、そのような観点から、本拠点が、研究・教育・成果発信・国内外のネットワーク形成の面で、今後より一層のリーダーシップを発揮されることを期待している。